

20. 胸部腫瘍性病変に対する radionuclide angiography (RNA) の意義

仙田 宏平 中条 正雄 嶋田 博
安江 森祐 横山 恵太 伊藤 茂樹

(国立名古屋病院・放)

胸部腫瘍性病変に対する RNA の臨床的意義を、その術式の検討を含めて、最近経験した縦隔または縦隔外胸部腫瘍ならびに心・大血管疾患計 48 症例について評価した。

RNA は、venography としては $^{99m}\text{Tc-HSA}$ を右・左肘静脈から 2 回に分けて注入し、別々に撮像する方法が血流動態異常を明確にする上に有用であった。大血管の走行異常や圧排・変位あるいは肺内の血流分布異常を判定するには、ECT を追加する方法が有用であった。RNA は、縦隔または縦隔外胸部腫瘍の存在および進展範囲の診断、これら腫瘍による血流障害程度の評価、ならびに心・大血管奇形または胸部血管病変との鑑別診断に有効であった。また、腫瘍性病変の血流分布を評価する上にも有効であった。

21. Hyperparathyroidism における 副甲状腺シンチの有用性について

増井 孝之 川合 宏彰 金子 昌生

(浜松医大・放)

Hyperparathyroidism の 11 症例、17 病変について、術前に診断された局在部位 ($^{201}\text{TlCl}$, $^{99m}\text{TcO}_4^-$ によるシンチグラフィー [RI], CT, US) と摘出術により判明した局在部位を比較し、RI の有用性について検討した。adenoma の局在診断率は、CT で 79.0%, US で 62.5%, RI で 50.0% であり、hyperplasia では CT, RI とともに 22.2%, US で 11.1% であった。3 者の中では CT が優れていた。また adenoma と hyperplasia の比較では、adenoma の局在診断率が高い傾向がみられた。RI, CT, US で診断された病変の平均径は約 2 cm, 平均の重さは約 2 g であった。hyperplasia の中には唯一 RI でのみ診断された病変があり、総合画像診断上、副甲状腺シンチグラフィーは大変有用なものであると思われた。